

she said,

土を、心を、ともにたがやして 町田で採れた美味しい野菜を これからも町田の人に食べてもらいたい



自分ができる関わり方で構わない。もっと農業に興味を持ってほしいと語る斎藤さん

NPO法人たがやすが設立されたのは2002年7月。その3年前に「生活クラブ生協」の組合員が始めた収穫援農作業がきっかけ。今やその活動は全国から注目されるようになったが、事務局長の斎藤恵美子さんはこう振り返る。「町田の野菜を、そして、つくり手が見えるものを食べたいという思いが発端です。一方で、担い手の高齢化などで都市の農家がこのままではなくなってしまう。でも、誰かが手伝えばなんとかなるんじゃないかと思ったのです」

最初の活動はナスの収穫のお手伝いで、草取り、片付けなどの作業から始まった。当初は、市や周辺の人たち20人と4軒の農家でスタートしたという。

「もうやめようかと言っていた農家さんが『もう少し俺たちも頑張ろうかな』とか『孫が頑張るまでやるよ』と言う。援農してうれしいのはそんな時ですね」
実際多くの農家が援農によって助けられ、勇気づけられているのだ。地道に活動を積み重ね、現在の会員は150人。参加する農家も30軒ほどに増えてきた。
同法人では、ほかにも直売所での野菜販売や宅配など、地場野菜の普及活動も行なっている。また、体験農園の運営やイベントを通して、市民が農業に触れる機会をつくるのにも積極的だ。たくさんの子どもたちも農業に触れている。「大人も子どもも土に触れると生き生きしてきますね。今後町田の農業が受け継がれていってほしい。『たがやす』がそのための拠点になれるようにと願っています」
多くの人の手が農を支える。その活動は今日も続いていく。

市内でも緑が豊かで、八王子に次いで農地が多く残る町田市。しかし、年々都市化が進むとともに、田畑や緑地は減少しており、農業では後継者不足などの問題も起こっている。そうした中、「都市農業を守りたい」と、17年も前から諸問題に取り組み、活動を続けてきた団体がある。「NPO法人たがやす」だ。

援農活動は、「援農」を受け入れる農家と、農作業を手伝う人がともに会員となって相互扶助の関係のもとで行われる。当時「援農」といえば無償ボランティアが多かった中、最初から援農者に対して農家が謝礼金を支払う有償ボランティアとしたことも先進的だった。もっともそんなやり方が最初からすんなり受け入れられたわけではない。「お手伝いしたいと言っても、援農者は素人ですから、有償とすることへの反発もありました。でも、ほとんどの農地は交通も不便なところにあります。交通費すら出ないのでは長く続かないでしょう」

決して多い額とは言えないが、有償としたことで、援農者は責任感を感じる。農家も必要以上にお客様扱いはしない。それがお互いにとっていい緊張感を生んでいるのだという。援農で大切なのはやはり信頼関係なのだ。需要と供給があって、信頼があって、なおかつ町田の環境や自然を守るという思いで一致していることが大前提でもある。



NPO法人アスレチッククラブ町田とのコラボ企画「いもづるの会」では子どもたちとサツマイモを栽培。収穫した野菜でバーベキューを楽しむなどのイベントも。研修農園は本格的。会員が会員を教え、真剣に農業技術を学ぶ。



THE まち人

MACHIBITO file 026

地域に
生きる

援農ボランティアで 生産者と市民をつなぎ 町田の農業を守り続けてゆく NPO法人たがやす

NPO法人 たがやす
TEL 042-794-9002
<http://npo-tagayasu.o.oo7.jp/>